

クリ「えな宝来」、「えな宝月」の成木前期における安定生産のための剪定指標

【要約】クリ「えな宝来」、「えな宝月」の成木前期樹の剪定では、結果母枝の種類、基部径、先端部径の太さを指標とし、最適なものを残す。「えな宝来」は発育枝でも雌花着生が良好であるが、「えな宝月」は前年結果枝を利用する方が良い。

中山間農業研究所 中津川支所

【連絡先】0573-72-2711

【背景・ねらい】

県育成のクリ品種「えな宝来」、「えな宝月」（平成28年3月品種登録）は、生産者や実需者のニーズである「栗きんとん」の加工に適し、現状の出荷端境期に出荷できる品種である。両品種に対する期待は高く、両品種合わせ8ha程が植栽されているが、現地では栽培年数が浅く、高品質安定生産のための栽培技術については、知見が乏しい。

そこで、安定生産のための剪定基準等を確立し、円滑な普及と生産量の増加を図る。

【成果の内容・特徴】

- 1 「えな宝来」では、前年結果枝、発育枝ともに、枝は長く（データ省略）、基部径（基部より5cm上の長径）と先端部径（先端より3芽と4芽の間の長径）が太いほど雌花数は多く着生し、枝の資質と雌花着生量の関係は中生品種「筑波」によく似ている（図1）。
- 2 「えな宝来」で「筑波」並みの雌花数（前年結果枝7.5個/枝、発育枝15個/枝）を目標とすると、前年結果枝では長さ40~60cm、基部径6~8mm以上、先端部径3~3.5mm以上で太いほど良く、発育枝では長さ80cm以上、基部径8~10mm以上、先端部径3~3.5mm以上で、長く太いほど良い（表1）。
- 3 「えな宝月」では、前年結果枝、発育枝ともに、枝の長さとの相関は低く（データ省略）、基部径及び先端部径が一定の太さ以上の場合に雌花数は安定し、枝の資質と雌花着生量の関係は早生品種「丹沢」によく似ている（図2）。
- 4 「えな宝月」で「丹沢」並みの雌花数（前年結果枝5個/枝、発育枝10個/枝）を目標とすると、前年結果枝では基部径6~8mm以上、先端部径2.5~3mm以上が良く、発育枝では基部径12~14mm以上、先端部径3~3.5mm以上が良い（表1）。

【成果の活用・留意点】

- 1 本指標は、岐阜県方式の低樹高・超低樹高仕立て（短幹変則主幹形整枝）における成木前期樹（樹齢7~14年生程度）の剪定時に活用する。
- 2 「えな宝来」の発育枝は比較的雌花着生が良好なため、前年結果枝と発育枝を併用した剪定が可能であるが、「えな宝月」の発育枝は細いと雌花着生が不安定なため、十分に樹冠が拡大するまでは発育枝の利用は避ける。
- 3 若木期から成木前期に至るまでの樹齢では、前年結果枝を使用し樹冠拡大を優先する。
- 4 剪定で残す結果母枝の本数（結果母枝密度）は、「えな宝来」は「筑波」タイプ、「えな宝月」は「丹沢」タイプであることを踏まえ、両品種の剪定を参考にする。

【具体的データ】

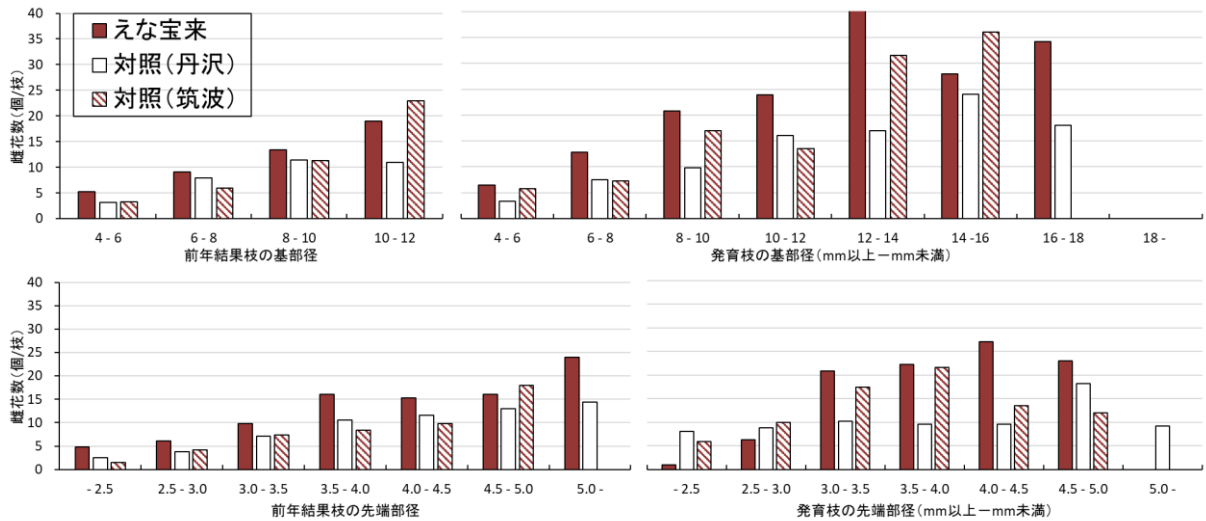


図1 「えな宝来」の成木前期樹における前年結果枝・発育枝別の「基部径と雌花数（上段）」及び「先端部径と雌花数（下段）」の関係（平成27～29年度平均）

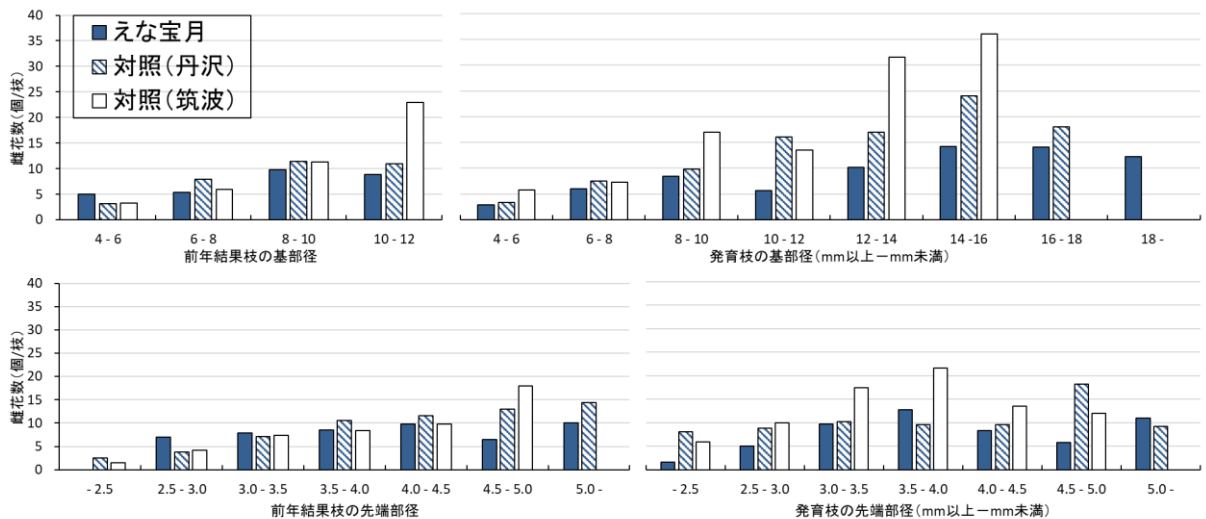


図2 「えな宝月」の成木前期樹における前年結果枝・発育枝別の「基部径と雌花数（上段）」及び「先端部径と雌花数（下段）」の関係（平成27～29年度平均）

表1 「えな宝来」、「えな宝月」の成木前期樹における剪定指標

品種	枝の種類	確保する雌花数目標	長さ	基部の太さ	先端部の太さ
えな宝来	前年結果枝	7.5個程度/枝	40～60cm	6～8mm以上 ※太いほど良い	3～3.5mm以上 ※太いほど良い
	発育枝	15個程度/枝	80cm以上 ※長いほど良い	8～10mm以上 ※太いほど良い	3～3.5mm以上 ※太いほど良い
えな宝月	前年結果枝	5個程度/枝	重視しない	6～8mm以上	2.5～3mm以上
	発育枝	10個程度/枝	重視しない	12～14mm以上	3～3.5mm以上

研究課題名：新品種「えな宝来」、「えな宝月」の高品質安定生産技術の確立（平成27～29年度）

研究担当者：磯村秀昭